

June bride—

6月の花嫁は幸せになるといわれています。

6月は家庭の守護神ジュノーの月。

ジュノーはローマ神話に登場するジュピターの妃で

6月をジューンと呼ぶのは彼女の名に由来します。

純粹無垢が宝石言葉である真珠は6月の誕生石。

花嫁を美しく彩るジュエリーといえば

その輝きが清楚で上品な真珠に勝るものはないでしょう。

クレオパトラ、エリザベス一世、ココ・シャネル

真珠に魅了された女性は数知れません。

「真珠の耳飾りの少女」は

オランダの画家フェルメールの作品。

少女の大きく見開かれたつぶらな瞳と

耳飾りにきらめく真珠が印象的…。

少女に出会うものの心を捉えて離しません。

ふるさとの風

June.2018



PEARLS

—美しき月の雫—

「自然のままでその完璧な美しさを誇る真珠は、人類が最初に出会った宝石である。」

G・F・クンツ博士の名著『The Book of The Pearl』(1908年)の冒頭の言葉である。

『ニッポンの真珠がいちばん美しい』

太古より人々を魅了して止まない真珠。

その神秘的で謎めいた“自然の芸術品”の美しさに匹敵する宝石はない。

遠い昔、採集した貝の中に光沢のある乳白色の珠を見出した人々は、自然の神秘ゆえの賜物に驚き、かつ畏敬の念を抱いたであろうに違いない。

真珠貝の中で奇跡的な偶然が重なって密やかに生を受けた最古の宝石は、数多の伝説をまといながら、ときには宗教の信仰の対象として、また医薬品の一つとして、その多くは貴族たちの装飾品として珍重されてきた。そしておよそ 100 年前、日本人の技術によって養殖を可能にし、天然の造形が織りなす唯一無二の個性的な真珠に対して、人の智恵と技で生み出された円くて白い養殖真珠が誕生した。

～ 天然真珠 history ～

真珠がいつの時代に発見されたかは定かではないが、古代の歴史書や神話には真珠が登場している。古代ローマの博物学者プリニウスが、当時の百科全書ともいべき『博物誌』の中で真珠について次のように記した一節がある。

「真珠の源、その生ずる場はカキとあまり違わない貝だ。これらの貝が生殖期に刺激されて、いわばぱっくり欠伸をし、露を受けて懐胎する。次いで分娩するとき、その貝の子は受けた露の性質に相応する真珠であるという。そして受けた露が純粋なものであればその光輝は著しいが、もしそれが濁ったものであれば生れたものも汚い色になるとのことだ。また空が荒れ模様だと真珠は色が薄くなる。というのは、真珠は空からの露によって孕むもので、海よりも空に関係が深い。そして空から曇った色を、また輝かしい朝にはそれに対応する鮮明な色をもらうのだからという。」

『プリニウスの博物誌第 I 巻第 9 巻 54 節 真珠と真珠貝』

またプリニウスは、古代エジプトの女王クレオパトラがローマの敵将アントニウスを招いた宴席で、真珠のイヤリングを酢に溶かして呑み干した逸話にも触れている。

世界有数の真珠採取地の中で、ペルシア湾は、プリニウスが記述したところの「世界で最も完全で美しい真珠」を求める人々の夢で大いに栄えた。紀元前から 20 世紀半ば、真珠採取はバーレーン島を中心にこの地域全体の経済を支配し、石油が発見される 1932 年まで、バーレーンの住民の 90 パーセントまでが真珠産業で生計を立てていたという。

その他、インドとスリランカの間にあるマンナール湾や紅海も真珠の産地として有名であった。

真珠の交易はそれらの地域から放射されるかのように、アジアを貫いて中東、北アフリカ、ヨーロッパ、そしてアメリカ大陸まで到達した。

真珠漁は高度に組織化され階級化されていた。その中で真珠採りといわれる男たちは、危険にさらされ過酷な労働条件の中、わずかな報酬で生計を立てながら一攫千金を狙っていた。

「イギリスの詩人ロバート・ブラウニングは『パラ・セルカス』*Para Celcus* に、「真珠採りの人生には二つの瞬間がある。一つは乞食の時、正に海に飛び込まんとする時。もう一つは王侯の時、獲物を手に浮き上がってくる時だ」と書いている。数千年にわたり、真珠採取のために行われた潜水は、真珠商人が所有する船から海へと飛び込む労働者たちに、本当にそうした夢を与えてきたのであった。」

『Pearls 真珠五千年の魅惑』

マルコ・ポーロの『東方見聞録』も真珠について記しているが、その中の“チパング島”（日本国）の項には「またこの国には多量の真珠が産する。ばら色をした円い大型の、とても美しい真珠である。ばら色真珠の価格は、白色真珠に勝るとも劣らない。」とあり、日本の真珠が優秀であると述べている。

日本では、約 5,500 年前の縄文遺跡から真珠が出土している。福井県の鳥浜貝塚で発掘された淡水真珠は直径が約 1.5 cm もあるハート形で、今も光を当てると微かな輝きを放つという。古代の真珠遺品とされるものに、法隆寺の五重塔の塔心に仏舎利として納められた真珠や、東大寺三月堂の不空羅索観音菩薩像の宝冠の飾りに用いられている真珠がある。

また、正倉院宝物には聖武天皇と光明皇后が大仏開眼会に身に着けたとされる冠を飾った 4,000 個にも及ぶ真珠が残されており、貴重な歴史遺産である。

伊勢神宮御神宝の「御白玉」として奉られる真珠は総数 81 丸。中分けして各々を白絹に包み、楊篋 2 合（2 個）に納める。上代には髪飾りなどに用いられていたとされる。

「白玉」「あわび玉」「あこや」と称された真珠は、歴史書や歌集にも登場する。

日本最古の文献として知られる『古事記』には“しらたま”として、『日本書紀』には“真珠”の名が見える。『古事記』の編纂者の太安万侶の墓から真珠が四粒見つかったのは昭和五十四年（1979）、翌々年には太安万侶墓出土 墓誌・真珠として国の重要文化財に指定された。

また、平安時代中期に編纂された法令集『延喜式』には、志摩国が朝廷に真珠を献上する義務のあることを記している。

同時代に編まれた日本最古の歌集『万葉集』にも真珠は数多く詠まれており、真珠を「白珠」「またま」「鮑玉」などと表現している。

伊勢の海の海人の島津が 鮑玉 取りて後もか 恋の繁けむ

『万葉集』巻七 一三二二

伊勢の海の海人の島津の真珠は 手に入れた後も恋しさは変わらないのではなからうか

江戸時代の図説百科事典『和漢三才図会』（寺島良安／著 正徳二年（1712））は、アコヤガイから採れる伊勢真珠、アサリ貝から採れる尾張真珠が薬の原料に使われたと記している。『日本山海名産図会』は、寛政十一年（1799）節閏月の画で日本各地の産物の採取や生産の様子を図解したものである。その中で、尾張真珠はイガイ（貽貝）の真珠とし

上品な伊勢真珠とは別物であるとし、アコヤガイの“アコヤ”の名の由来にもふれている。

『三重県水産図説』（明治十四年（1881））、『三重県水産図解』（明治十六年（1883））は、内国勸業博覧会の開催にあたり三重県が製作したもので、三重県内の漁法や魚種を細密に描写したことで知られており日本の水産資料としても貴重なものである。

これらの資料には、志摩国の真珠漁についての記述や、真珠採りの海女の姿なども記されており、当時の天然真珠採取の様子が窺える。江戸期の浮世絵師歌川国貞（三代豊国）作の「光氏磯辺遊の図」は、女性達を伴った光源氏が、二見浦を訪れ、海女たちの鮑漁を眺めている風景を描いている。こうした漁の際に鮑真珠が発見され、やがては皇室の宝物に加えられたという。

日本では真珠採りが有史前の時代から行われ、特に伊勢志摩地方と長崎県大村湾で盛んであった。しかし採れる真珠の数は非常に少なかったと考えられる。一般の宝飾品とされた例はなく、鎮壇などの儀式用や医薬品として利用されていた。真珠が重要な産業となることはなかったのである。

日本で真珠が宝飾品として位置づけられ産業として発達していったのは、明治に入り養殖真珠の技術が開発されてからのことである。

～ 養殖真珠 history ～

貝を開いたときに、自然にできた真珠が見つかる確率は、万にひとつもないという。値千金であるがゆえに、命を賭して海に潜る真珠採りや、アメリカ各地の川に真珠を求めて人々が殺到したゴールドラッシュならぬパールラッシュなど、古代から近世まで、天然真珠を手にするために起きた悲劇や騒動は枚挙にいとまがない。

真珠の産地では、天然資源を枯らさぬために、国や地域によって乱獲を防ぐさまざまな政策がしかれ、同時に真珠を人の手で生み出す試みが繰り返されてきた。

中国では早くも十一世紀、淡水産真珠貝の貝殻の内側に金属製の小さな仏像を貼り付け、その上に真珠層が重なるようにして“仏像真珠”なるものがつくられたという。 —略—

仏像真珠をつくる技は中国からヨーロッパへ伝わった。スウェーデンの名高い博物学者、カール・フォン・リンネ（1707～1778）は、これをヒントに“ブリストター（瘤）”と呼ばれる殻付き真珠の創出に成功する。リンネは殻に付着していない真珠も試作したが、いずれにしても生産は軌道に乗らなかった。

明治二十六年（1893）、日本の真珠養殖業の立役者である御木本幸吉（1858～1954）が最初に養殖に成功したのも、貝殻に密着した“半円真珠”であった。御木本をはじめ、真珠養殖を志した人々や生物学者たちの努力が実を結び、丸い養殖真珠が完成するのは、更にその十二年後のことになる。

『NHK 美の壺 真珠』

人の智慧と技、そして自然によって生み出される養殖真珠。
その歴史は、真珠王・御木本幸吉を抜きには語れない—。

～ Kokichi Mikimoto story 御木本幸吉物語 ～

Episode 1 真珠との出会い

三重県鳥羽湾に浮かぶ相島（現ミキモト真珠島）。御木本幸吉は明治二十六年（1893）この地で世界に先駆けて真珠養殖を成功させた。およそ120年前のことである。

御木本幸吉は、安政五年（1858）、志摩国鳥羽浦の大里町（現・三重県鳥羽市）にうどん屋「阿波幸」の長男として誕生した。幼名は吉松と名付けられた。

家業の傍ら青物の行商や穀物商など様々な商売を経験した幸吉は二十歳で家督を相続、六代目御木本幸吉となった。

幸吉が真珠に興味を覚えたのは横浜に出掛けた時のこと。外国人が海産物の売買を盛んに行っており、さらに天然真珠が大人気のため高値で買われていることに注目した。

鳥羽に戻った幸吉が新しく始めたのは鳥羽の地の利を生かした海産物の商いだった。しかし真珠の魅力を決して忘れたわけではなかったのである。

Episode 2 真珠養殖

海産物商が軌道に乗り真珠の取引も手掛けるようになった幸吉は、真珠の鑑別や評価については志摩地方では第一人者となっていた。明治二十年（1887）には宮内省から真珠の注文がありこれが最初の御用命であった。

しかし、当時は天然真珠を高額で取引する目的でアコヤ貝が乱獲され絶滅の危機に瀕していた。伊勢志摩の真珠の将来を危惧した幸吉は、大日本水産会幹事長の柳植悦の協力を得、アコヤ貝の増殖を手掛けていった。

明治二十三年（1890）4月、東京で行われた第三回内国勸業博覧会に真珠と生きた真珠貝を出品し、志摩の真珠は話題を呼んだ。その時出会った東京帝国大学教授理学博士の箕作佳吉に真珠養殖の教を乞うことになる。松月清郎氏は『御木本幸吉と真珠養殖』（『三重学』）の中で次のように記している。「当時まだ、真珠の成因は解明の途中にあった。箕作佳吉は真珠を半分に割り、幸吉に示した。そして中心に芯のあること、その周りを真珠質という結晶が層状に形成されていること、砂粒など円いものを貝の体内に入れば、それを芯にして真珠ができる可能性があること、だが、誰も成功していないことなどを説明した。」

幸吉は当時理論的には可能であったが実際に成功した例はないことを知り真珠養殖に情熱を燃やしていったのである。

Episode 3 半円真珠

鳥羽の相島と志摩の神明浦で真珠養殖の実験をスタートさせた幸吉。試行錯誤の日々には資金難等の多くの苦難が伴った。また、周囲から「あいつは山師や」と非難を受け、「わしは山師やない。大海師や」と言い返した逸話が残っているという。

明治二十五年（1892）11月には神明浦に真珠養殖にとって最大の脅威の赤潮が大発生し5,000個の養殖実験貝が全滅。幸い相島は被害を免れこのわずか1,000個のアコヤ貝の中から世界初の養殖真珠が誕生することになるのである。

数多の苦勞を乗り越えて幸吉が世界で初めて養殖真珠を手にしたのは、明治二十六年（1893）7月11日、最愛の妻うめと鳥羽の相島に渡ったときのこと。竹籠の中にある貝殻の内側に付着した半球型の真珠が5個あることを発見。実験開始から3年の年月が経っていた。幸吉はこの半円形の真珠を加工し“半円真珠”と名付け商品化。明治二十九年（1896）には特許権も取得している。また、真珠養殖の拠点^{なとく}を英虞湾内の多徳島に置き一族縁者数十名と移り住み事業に本格的に取り組んでいった。明治三十一年（1898）多徳島での最初の採集、その中から光沢の素晴らしい3個を選び明治天皇へ献納したという。

また、明治三十二年（1899）には東京銀座に御木本真珠店（現ミキモト）を開設し、着実に実績を上げていった。同時に養殖真珠のニュースは国内ばかりでなく諸外国へも伝わり外国人のバイヤーも来訪するようになった。

Episode 4 真円真珠

半円真珠は順調に増産を続けていった。明治三十六年（1903）、銀座4丁目の大通りに進出した御木本真珠店は、史上初の真珠専門店であった。文明開化の最前線であった銀座に位置するこの店は、外国へ日本の養殖真珠を宣伝する格好の場所であると考えたのである。また、半円真珠を使った装身具が次々と考案されていった。

一方、多徳島の養殖場では明治三十一年から半円真珠と並行して丸く美しい球形の真円真珠の開発も行われていた。

日露戦争が始まった翌年の明治三十八年（1905）1月、多徳島は赤潮の大被害に見舞われた。以前よりも猛威を振るった赤潮により育てていた稚貝約100万個は危機に瀕した。この時の様子が次のように伝えられている。—— 幸吉は、貝を即刻避難させるため、200人近い海女を集めて言った。「給金は五割増。（からだを温める）薪は3倍だけ。今戦場で兵士たちは命がけで戦っている。我々は命がけで貝を助けるのだ。」——

こうして被害を受けた貝はかるうじて5分の1が助かり、その中に待望の真円真珠が5個光り輝いていたのである。真円真珠、いわゆる“八方ころがし”の誕生には、半円真珠の完成からさらに12年の歳月を要した。

この年の十一月、日露戦争戦勝報告のために伊勢神宮に行幸された明治天皇に拝謁した幸吉は、世界へ進出する大きな決意と信念をこの言葉に託し陛下に申し上げた。

「世界中の女性の首を真珠でしめてごらんにいれます。」

半円真珠の発明からおよそ100年、その言葉は現実のものとなった。

翌明治三十九年（1906）、幸吉は真珠養殖と真珠の海外輸出に関する功績を認められ、緑綬褒章を授与された。48歳であった。

日本の養殖真珠産業は御木本幸吉の半円真珠から始まったが、その後の真円真珠養殖技術の開発は、御木本幸吉の他に^{みせつへい}見瀬辰平、^{にしかわとうきち}西川藤吉（御木本幸吉の次女の夫）、藤田輔世・^{まさよ}昌世兄弟（西川藤吉の部下）、^{くわはらおつきち}桑原乙吉等の先駆者たちの功績に基づいて発展してきたことも忘れてはならない。

Episode 5 世界へ

明治も終わり近く、真円真珠が本格的に養殖され始め、大正時代に入ると大阪、神戸に御木本真珠店が開店した。海外支店も大正二年（1913）のロンドンを皮切りにニューヨーク、ロサンゼルス、パリ、シカゴ、サンフランシスコ、ボンベイなど主要都市にも開設し、国際的に事業を展開させていった。決して順調なことばかりではなかったが、幸吉は、不評を好評に転じていった。

「パリ裁判」においては養殖真珠と天然真珠は本質的には違いはないと証明され、養殖真珠は宝石として世界に認められたのである。

※パリ裁判…大正十年（1921）ヨーロッパの宝石商たちが養殖真珠をニセモノであるとしてミキモトの排斥運動を展開。御木本側はフランスのボルドー大学ブータン教授等の権威者を立てて訴訟に勝訴。

また、明治二十六年（1893）のシカゴでの万国博覧会をはじめ、世界各国の博覧会に養殖真珠を使った工芸品などを出品、公共の場で養殖真珠を公開することにより世界に日本の養殖真珠の存在を知らしめたのである。そして世界大恐慌、第二次世界大戦での困難も乗り越え、日本は世界の主要な養殖真珠生産国として着実にその地位を確立していき、ミキモトは養殖真珠の国際市場を左右するまでになっていた。

昭和二年（1927）、幸吉は実業家の渋沢栄一の紹介でニューヨーク郊外の発明王エジソンの自宅を訪れている。エジソンはすでに養殖真珠の発明家として全米に知られていた幸吉の訪問を喜び、贈り物として出された美しい養殖真珠を見て感嘆の声を上げたという。

そして二人の間にはこのようなやりとりがあった。

エジソン「私の研究所でできなかったものがふたつある。一つはダイヤモンド、もう一つは真珠です。あなたの発明は世界の驚異です。」

幸吉「あなたが発明界の月なら、私は数多い星の一つにすぎません。」

この時エジソン 80 歳、幸吉 69 歳だった。

Episode 6 郷土愛

幸吉はふるさと伊勢志摩をこよなく愛した。「日本中を公園にしたい」その言葉通り地元の良い風景を守るため尽力した。そのかいあって、伊勢志摩地方は昭和二十一年（1946）戦後初の国立公園として指定を受けている。

伊勢神宮への崇敬の念がことのほか深かった幸吉は参宮道の新設や整備にも力を注いだ。内宮と外宮を最短距離（3.5km）で結ぶ御木本道路は、昭和二十一年、御木本幸吉米寿の祝いに宇治山田市に 50 万円の資金を贈り新たに開設された道路である。当初は両宮参拝の人々のために人と自転車の専用道路であった。旅人に日陰をとという配慮のため沿道は杉並木とした。その後時代が進むにつれ交通量が増加、車の通行を許可し道幅を拡張し現在に至っている。また、皇族や国賓、各国の要人の伊勢神宮参拝時の正式経路の御幸道路の両側には街路樹を寄贈。桜や楓が植栽され四季折々美しく彩られた。

幸吉は伊勢神宮への感謝の気持ちを寄附という形で表現したのである。

明治四十四年（1911）発行の『神苑会史料』記載の寄附金名簿には、三井家、岩崎家の財閥に次いで名前が載っており莫大な額の寄附をしたことが窺われる。

※神苑会…明治十九年（1886）～明治四十四年（1911）に存在した財団法人。神宮周辺を整備するために太田小三郎らによって創設された。全国的な組織となり、寄附を募り神苑整備事業に着手した。

Episode 7 ミキモト真珠島

鳥羽の相島（現ミキモト真珠島）は、幸吉と親交のあった洪沢栄一が提唱する民間外交の場として昭和四年（1929）整備し幸吉自ら“真珠ヶ島”と命名、養殖真珠誕生の地として内外の来訪者に公開した。各国の王族、政治家や大公使など来日したほとんどの外国人が訪れたといわれている。第二次大戦により軍部に島を提供することになったが戦後荒れ果てた島を整備、昭和二十六年（1951）開島し、「観光・産業・教育」を三位一体とした世界的にも類を見ない施設、ミキモト真珠島の新しい歴史が始まった。

現在、島内には御木本幸吉記念館、真珠博物館、パールプラザ等がある。

Episode 8 The ミキモト・スタイル

御木本幸吉は、半円真珠の養殖に成功した後、それがそのままでは商品にならないことを知っていた。真珠を使った宝飾品を完成させるには往時の日本では、黎明期であったヨーロッパの技法を学ぶ必要があった。明治の頃の日本の宝飾品といえば簪^{かんざし}や笄^{こうがい}、櫛、帯留めなどの世界である。その時代にネックレスやブローチ、リングに思いを馳せ、制作に取り組んだのである。このことから幸吉が真珠養殖の研究者にとどまらず、日本の宝飾産業を立ち上げるための広い視野をもった先駆者であることがわかる。

『真珠がつなぐ ミキモトのウインドウ』

御木本真珠店が現在地の東京銀座に新築移転した翌年の明治四十年（1907）、日本初の本格的な装身具加工工場「御木本金細工工場」を開設した。そして優秀な人材を確保し完成度の高い装身具の制作に取り組んでいった。昭和初期に完成の域に達する“ミキモト・スタイル”はここから始まったといえる。

ミキモト・スタイルの最高峰ともいえる「矢車」は、昭和十二年（1937）パリ万国博に出品された帯留で、世界中から賞賛を受けた。精密華麗な意匠と技術を究めた多機能ジュエリーで日本の近代宝飾史に名を残す逸品である。

昭和四十七年（1972）御木本真珠店は社名を株式会社ミキモトへ変更し、総合宝飾店として現在に至っている。

今年、御木本幸吉が真珠の養殖に成功して125年が経つ。

真珠を育む海と土地は、平和の郷である。その美しい自然の営みこそが、美の極致を創造する。しかし天然であれ養殖であれそれを第一級の宝飾品に仕上げるのは、人間の営為である。自然と人間の美の総和を維持するための厳選主義とそれを貫く信念、そこに自ずと格式というものが養われる。素材、意匠と細工、格式、すなわち真珠の品質、宝飾品の完成度、信頼を約束する品格あるサービス、この三位一体を実現した幸吉の遺志は、見事に現代も生き続け、次世紀へと受け継がれようとしている。

『MIKIMOTO ミキモト/真珠王とその宝石店 100年』

静かな潮の流れの英虞湾に夕日が沈む。

入り江にたゆとう真珠筏——

この海が125年前

世界に先駆けて


真珠養殖を可能にした。

賢島大橋から臨む眺めは
「日本の夕日百選」に選ばれています。

図書館だより 6月号 No.196 増刊 ふるさとの風 June.2018 平成30(2018)年6月28日発行

(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者/株式会社図書館流通センター (住所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町 13-35
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2018 mami ishikura



ふるさとの風

平成三十年 June.2018

—PEARLS—

【参考資料】

「プリニウスの博物誌第Ⅰ巻」

プリニウス／著 雄山閣出版社 462／ブ／1（小俣図書館蔵）

「真珠」（NHK 美の壺） 日本放送出版協会 755.3／シ

「ニッポンの真珠がいちばん美しい」 小松博、いなとみのえ／共著 織研新聞社 L666／コ

「Pearls 真珠五千年の魅惑」

クリスティン・ジョイス、シェライ・アディソン／共著 エディコム、徳間書店 383.3／ジ

「パール 海の宝石」 ユベール・バリ／著 ブックエンド L667／バ

「パール・ジュエリー」（別冊太陽） 平凡社 755.3／パ

「貝Ⅲ」（ものと人間の文化史） 白井祥平／著 法政大学出版局 664.7／シ／3

「東方見聞録2」（東洋文庫 183） マルコ・ポーロ／著 平凡社 292.09／マ／2

「和漢三才図会（上）」 寺島良安／著 和漢三才図会刊行委員会／編 R031.2／テ／1

「日本山海名産図会」（日本名所図会全集 11） 名著普及会 291.09／ニ／11

「三重県水産図解」 東海水産科学協会・海の博物館／編 L665／ミ

「三重県水産図説」 東海水産科学協会・海の博物館／編 L665／ミ

「御木本幸吉と真珠養殖」 松月清郎／著（三重学 朴恵淑／編著） 風媒社 L290／パ

「真珠がつなぐミキモトのウインドウ」 六耀社 755.3／シ

「MIKIMOTO ミキモト／真珠王とその宝石店100年」 Kila 編集部 L755／ミ

「真珠王ものがたり」 乾淳子／編 伊勢志摩編集室 L289／ミ

「伊勢神宮 常若の聖地」 千種清美／編 ウェッジ L174／チ

「読売新聞よみほっと日曜版名言巡礼」（平成二十八年（2016）12月11日）

「ミキモト真珠島・MIKIMOTO ホームページ」